

古書のたのしみ（令和七年五月）

土屋 博

一「潤一郎¹ 源氏物語 卷二十四及び卷二十五 源氏物語和歌講義」

（中央公論社、昭和十六年刊、豫約會費金壹圓、一八八頁＋一八六頁）

桐壺の卷「限りとて別るゝ道の悲しきにいかまほしきは命なりけり」（今を限りとして、君にお別れ申し上げて行く死出の旅路の悲しきを思ふと、何とかして生きたいのは十分の命でございます）より、夢浮橋の卷「法の師と尋ぬる道をしるべにておもはぬ山にふみまどふかな」（僧都を法の師と仰いで佛の教を尋ねるために山路へ分け入りながら、その路が手引になつて思はぬ戀の山に踏み迷ふことよ）まで、源氏物語中、全七百九拾五首の谷崎潤一郎による講義なり。

谷崎潤一郎、例言に曰く、「此の物語の中の和歌は、それが挿入してある前後の文章とのつながりが非常に微妙に出来てゐるので、そのつゞき工合の面白さを味はふことが、和歌の内容を理解するのと同等に大切なのであるから、此の講義は必ず本文と對照しつつ讀んで戴きたい」と。



二「源氏物語の短歌引歌」 青柳節子著

（四季短歌會、平成十四年刊、定價七千圓、本文四八一頁）

古書價格二千圓也。著者青柳節子は、作家近藤富枝（一九二三年生れ、二〇一六年歿、東京女子大國文科卒）の妹なり。藤原俊成曰く、「源氏見ざる歌よみは遺恨のことなり」と。本書は源氏の和歌に興味を有する者にとり、バイブルの如き名著なり。

三「えんぴつで楽しむ源氏物語 六週間で味わう二百十首」 針本正行監修

（株CB、平成十八年刊、定價本體千四百圓＋税、一四〇頁）

古書價格八九九圓也。監修者（國學院大學教授）曰く、「源氏物語の和歌を読むことは、歌を詠む男君の心に觸れ、歌を詠む女君の心を感じることになる」と。

四「變體假名で読む 源氏物語全和歌」 井上八雲編、中田武司監修

（新典社、二〇一〇年刊、定價本體三千八百圓＋税、二三八頁）

古書價格三萬圓也。待望の書を遂に入手せり。和歌本文は、宮内廳書陵部藏「源氏物語」影印本、すなはち青表紙本なり。左側に變體假名字源（たとへば、「かぎり」とは「加義利止天」といった具合）及び口語譯を附す。



五「古文書入門 くずし字で百人一首を楽しむ」 中野三敏著

（角川文藝出版、平成二十二年刊、定價本體二千圓＋税、二二二頁）

古書價格千百圓也。江戸末期の長野美波留「百人一首抄」（文政二年序版）の印影を掲ぐ。中野三敏（一九三五年生れ、二〇一九年歿）は九州大學名譽教授。江戸小説の研究者。

六「くずし字で読む 百人一首一夕話」 城崎陽子、大内瑞恵、佐藤瞳、渡部修編著

（武藏野書院、二〇一八年刊、定價本體千八百圓＋税、一三〇頁）

古書價格六百圓也。ひとよがたりの原著者尾崎雅嘉は、一七五五年生れ、一八二七年歿。

七「土佐日記燈 上中下」富士谷御杖先生述

（東京國光社發兌、明治三十一年刊、全三冊正價金一圓五十錢、上卷二六八頁、中卷三四六頁、下卷三八〇頁）

全三冊揃古書價格五百五拾圓也。富士谷御杖（みつえ）（一七六八年生れ、一八二四年歿）は、江戸時代の國學者。上中下巻併せ、厚さ五センチ、重量千二百グラムの大著なり。

（令和七年六月五日受附）